「安全運行 影響なかった」

台車亀裂 南海、安全委とズレ

「安全運行に影響はなかった」。特急「ラピート」の台車から亀裂が見つかった問題を受け、30日に初めて記者会見を開いた南海電鉄は、危険性は低かったとの考えを強調した。「最悪の場合、脱線につながる恐れもあった」と指摘する運輸安全委員会との認識のずれが浮かび上がった。

「お客様に多大なご心配、ご不安な思いをおかけしたことを深くおわび申し上げます」。南海の梶谷知志・鉄道営業本部長は会見の冒頭でこう述べた。

この後吉田実・車両部長らが説明。国の運輸安全委員会が深刻な事故につながりかねない「重大インシデント」に認定した長さ14㌢の亀裂について、「直ちに安全運行に影響を与えるものではない」と強調した。運輸安全委の鉄道事故調査官は「最悪のケースではモーターなどの部品が脱落し、脱線につながる可能性があった」と指摘したが、南海は会見で「脱線の恐れはないと考えている」と主張した。

根拠として、モーターと台車枠の溶接部の総延長が143㌢あり、亀裂の長さがその70%に達すると破断するとされるが、14㌢の亀裂は9%にとどまっていると説明。「破断にはほど遠く、あと数十万㌔走行しなければ破断が起きる長さにならなかった」とした。

この車両は10日に1回の目視検査を8月15日に受けたが、異状なしとされた。南海は「ほこりの付着で、目視では傷は見つけられない」と釈明。8年に1回の最も大規模な検査が9月に予定されており、そのときには発見できたとの認識も示した。

ラピートの車両では2017年11月と今年4月に台車枠とモーターの溶接部付近で亀裂が計5件見つかっていた。南海はこれら亀裂が生じた部位について検査を強化していたが、今回見つかった亀裂はそれらと部位が異なり、対象になっていなかった。南海は他のラピートの車両でも亀裂が起きた部位で微細な傷を調べる緊急点検を実施。うち1両で6㌢の亀裂を見つけた。担当者は「今後（亀裂が）発生することはない」と明言した。「他の鉄道会社に比べ亀裂の発生が多いのでは」との質問には「比較していないので多いとはいえない」とした。

ラピートの累積走行距離は400万㌔を超えている。南海は台車の交換について距離や年数の基準を設けておらず、ラピートも当面は交換を予定していなかったという。「より安全性の高い台車への変更」という対策方針を打ち出したが、「これからメーカーと話し合う」とし、時期は明らかにしなかった。（加戸靖史）

▼1面参照

記者会見の冒頭、頭を下げる南海電鉄の執行役員ら＝30日午後5時2分、大阪市中央区

亀裂 新幹線でも発生例

鉄道車両の台車は、モーターや車軸を固定する枠などで構成される。南海は安全運行に支障はなかったと主張したが、ラピートと同様、複数の部品を取り付けた溶接部分に亀裂が生じたケースでは過去に深刻な事故やトラブルもあった。

2016年5月に起きた東京都板橋区の東武東上線の列車脱線事故では、台車の外枠の底面と側面にそれぞれ18㌢の亀裂があった。国の運輸安全委員会の報告書は、台車の溶接部分に生じた亀裂の影響で車体のバランスが崩れたことが脱線の原因とし、事故の3年前には亀裂ができていた可能性があると指摘した。

17年12月には、博多発東京行き新幹線のぞみ34号で乗務員が異音や異臭などに気づいたのに、約3時間走行を続けた。台車枠の溶接部分から亀裂が生じており、外枠の亀裂の長さは底面のほぼすべての16㌢、側面（17㌢）も大半の14㌢に達し、破断寸前だった。

この問題を受けて改定された国土交通省の台車枠検査マニュアルは、4㌢程度の亀裂が台車枠の変形する約60㌢に至るまで拡大するには、120万～150万㌔メートルの走行が必要と指摘。亀裂が小さいうちに発見して対処すれば「脱線などの重大事故は防止できる」と明記している。また、目視検査ではなく、鉄粉と電流で磁気の乱れから小さな傷を調べる「探傷検査」を求めている。

JR西日本は現在、新幹線について、さらに精密に点検できる超音波検査を導入。それでも見落とす可能性は残るため、走行中の台車の温度上昇を地上で検知するセンサーを設置するなど対策を重ねている。（波多野大介）

2年間で8件は異常

鉄道の安全対策に詳しい関西大の安部誠治教授（交通政策論）の話　2年間で8件もの亀裂が、台車の溶接部で起きたのは異常。南海電鉄は重大なこととして考えるべきだ。この2年間の対応は後手に回っている。

国会議員証拠金 立て替え

証券監視委 JPアセット 処分勧告

JPアセット証券（東京都中央区）が顧客のデリバティブ（金融派生商品）取引をめぐり、証拠金の不足分を立て替えたなどとして、証券取引等監視委員会は30日、金融商品取引法違反（特別の利益提供）の疑いで同社を行政処分するよう金融庁に勧告した。関係者によると、この顧客は国会議員だという。

発表などによると、監視委の検査対象の昨年10月～今年5月の141営業日のうち111営業日で、取引のために議員が預ける証拠金が約6200万～約40万円不足していた。同社は不足分を立て替えて取引を続けさせ、さらに新規の取引も受けていた。議員から強く取引継続の意思を示されていたという。

監視委は「特別な利益を提供する行為で、社会通念上、妥当性と相当性を著しく欠く」と指摘した。同社は「検査結果を真摯に受け止める」としている。

殺害後口裏合わせか

千葉県警捜査

千葉市の内装工、宍倉拓也さん（当時23）を海に転落させて殺害したとして男3人が千葉県警に逮捕された事件で、殺害後に3人が口裏合わせをしたり、殺人容疑で逮捕されたのは、拓也さんの養父で千葉県八街市、内装会社社長宍倉靖雄（48）▽同県四街道市、彫り師佐中佑輔（31）▽住所不定、内装工金子栄司（50）の3容疑者。捜査関係者によると、3人は拓也さんの殺害を計画し、県外で働いていた拓也さんを新年会名目で呼び出して千葉市内の飲食店で酒を飲むなどした後、釣りをするために富津市の浜金谷港に向かった。拓也さんは、佐中、金子両容疑者と釣りをしている最中に海に突き落とされたと、県警はみている。

佐中、金子両容疑者は、拓也さんが海に転落した後、近くに止めた車の中にいた宍倉容疑者と合流。供述などによると、3人は拓也さんが海から岸壁に上がっていないかを確認したうえで、警察に事情を聴かれた際に備えて「釣りをしていて行方不明になった」という趣旨の口裏合わせをしていたという。その後、3人が拓也さんの携帯電話に電話をかけ、帰宅を呼びかけるように装った形跡もあったという。（松本江里加、多田晃子）

拓也さんの携帯電話に電話をかけたりしていた疑いがあることが、捜査関係者への取材でわかった。県警は、事件の発覚を免れるための偽装工作だったとみて

佐賀の病院 孤立解消

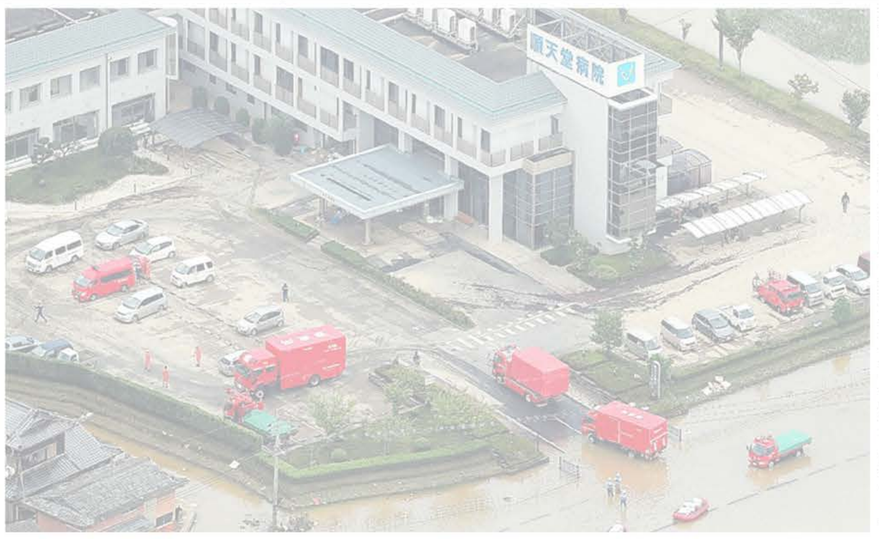
九州北部大雨 油流出、回収続く

九州北部を襲った記録的な大雨で、周囲が冠水して孤立していた佐賀県大町町の順天堂病院は30日、排水作業などで水位が下がって孤立状態は解消された。一方、近くを流れる六角川には油膜が広がっている。国土交通省は付近の工場から流れ出た油とみている。

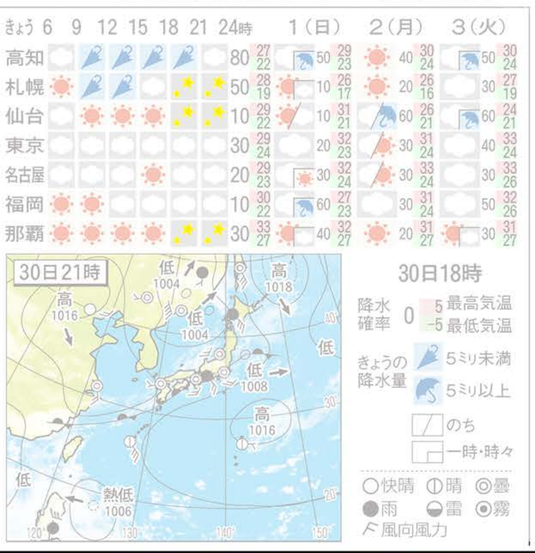
順天堂病院周辺では、国交省九州地方整備局がポンプ車で排水などを行い、一般車両が通行できる程度に冠水が解消。整備局によると、排水作業は夕方には終了した。

国交省武雄河川事務所によると、近くを流れる六角川で確認された油膜は、有明海につながる河口付近まで広がっている。県によると、病院から北西に約1㌔のところにある佐賀鉄工所から流れ出た油は、推定5万㍑。鉄工所の従業員や自衛隊、消防などが回収作業を進めている。

工場周辺の住宅の周りにも油は広がり、水がひいて片付けを始めた住民の中には「油のにおいがきつい」とマスクをつける人もいた。浸水による泥水だけでなく油の除去も加わるため、住民たちの片付けの手間がさらにかかっている。



水位が下がり、救援のため順天堂病院に入る消防車両＝30日午前、佐賀県大町町、本社ヘリから、堀英治撮影



前線が南下した影響で、西日本は太平洋側で雨。一部では雷も。日本海側はおおむね曇り。気温は全域で平年より低め。